

基調講演

京都府国際センター移転記念講演会

「多文化共生の視点からみた京都の国際化」

(公財)京都府国際センター 理事長
山極 壽一

文化的多様性

SDG s は世界中で積極的に取り組まれています、最近思うに人間が生きる上で不可欠なものであるにもかかわらず SDG s の目標になっていないものがあります。それは何かというと「文化」です。文化というのは体験と共感によって心と体に埋め込まれた意識や価値観であり、数値化されないゆえ、目標にならないのだと思います。文化の生産物はたくさんあります。わたしたちの周りにあるものはすべて文化の生産物です。しかしそれはアウトプットであって、文化そのものは心と体に埋め込まれたものなのです。文化は SDG s の目標にはなりませんが、地域に根差しながらもグローバルに共有できるものなのだと思います。

私が今所長をしている総合地球環境学研究所は2001年4月に設立されましたが、「地球環境問題の根幹は人間の文化の問題である」と宣言してこの21年間やってきました。環境問題というと自然科学の領域のように感じられる方が多いと思いますが、これは文化の問題であるということです。同じ年にパリでユネスコ総会が開催され、「文化的多様性に関する世界宣言」が採択されました。ここには文化的多様性についてたいへん重要なことが書かれているので紹介します。「生物的多様性が自然にとって必要であるのと同様に、文化的多様性は、交流、革新、創造の源として、人類に必要な

ものである」こう第1条に書いてあります。文化は多様でなければならないということです。第2条には「地球上の社会がますます多様性を増している今日、多元的であり多様で活力に満ちた文化的アイデンティティを個々に持つ民族や集団同士が、互いに共生しようという意志を持つとともに、調和の取れた形で相互に影響を与え合う環境を確保することは、必要不可欠である」と書かれています。そして第7条には「創造は、文化的伝統の上に成し遂げられるものであるが、同時に他の複数の文化との接触により、開花するものである」とあります。つまり、文化というものは個性的で多様であるが、他の複数の文化と接触することによって未来を拓くことができるということなのです。

今、世界では様々な環境問題、戦争、新型コロナウイルスの蔓延などが起こっていて、何か未来は暗く、世界は閉じているという閉塞感がある一方、SNSを通じて世界中の出来事が目に入り、耳に入ってくることによって世界は開かれているという感覚もある。つまり何か捻じれているなという感じです。その中で、先ほど申し上げた個性的で多様な文化というものが、世界中に張り巡らされた通信機器とプラットフォームにより無国籍化しています。いわば金太郎飴みたいに同じようなものになりつつある。その中で一律の価値観によって格差が拡大しています。

そしてよりよい生活を求めて、移民や大移動や複数居住ということが起こりつつある。グローバルな動きがさらに強まっているということです。今われわれは、信用社会（人が人を信頼する社会）から契約社会（人と人とが濃密に付き合わずに、人が制度やシステムを信用してそこに契約を結んでいくという社会）にまっしぐらに突き進んでいると言っても過言ではないかもしれない。これまで人と人とを結びつけてきた 3 つの縁（地縁・血縁・社縁）が喪失しつつあるということです。だからみんな新しい縁を求めているようなイベントに参加しようとしています。つい最近サッカーのワールドカップがあり、ものすごい人々が集まりました。あれは一時的な縁を求めてみんなで集まろうという試みに違いないと思います。でも、一時的な縁じゃなくて、やはり信頼できる持続的な縁を作らなくてはならない。そのためには現代の実勢に応じて新たな社交による文化を再構築しなければならないというのが私の意見です。

社交とは何か？日本が誇る劇作家で一昨年亡くなった山崎正和さんが「社交する人間」という本で詳しく述べられていますので、いくつか引用します。社交とは

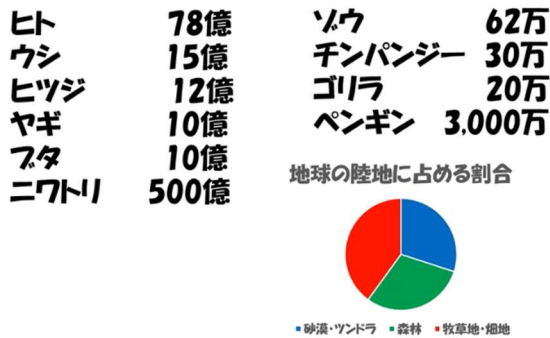
「人間のあらゆる欲望を楽天的に充足しつつ、しかしその充足の方法のなかに仕掛け（礼儀作法）を設け、それによって満足を暴走から守ろうという試み」と書かれています。「参加者はみずからの表情も発言も、内面の感情そのものもその起伏に合わせ、協力してリズムを盛り上げねばならない」、「行動の全体をまるで音楽のように一つの緊張感で貫く」まさに社交とは音楽であると思います。山崎さんは、社交とはリズムであり音楽であると言っています。そして、社交とは文化そのものであるとも言っています。われわれは言葉で付き合っているように感じるかも知れませんが、でも例えばサッカーという試合は文化や言語の違う国の人々がチームを組んで、そして身体を共鳴させてチームワークを作り、それで戦い合って勝敗を決めています。この中に言葉は介在しない。つまり、言葉で付き合うのではなく、身体を共鳴し、場や目的を共有して、何か一緒に物語を作り上げていくという行為が社交なのです。そういうことをやりながら人々は信頼関係というものを紡ぎ、文化というものを作っていくことができるのだと思います。

私たちが直面している脅威

私たちが今直面する脅威の一つが新型コロナウイルスによるパンデミックです。今また更に増え始めている。そしてロシアによるウクライナへの侵攻による戦争、とりわけ核戦争への脅威が強まっています。1989 年にベルリンの壁が崩壊して以来、毎年のように世界各地で戦争や紛争が起こってきましたが、いまだにわれわれはその紛争や戦争というものを解決していない。そしてもう一つ、地球の温暖化によって様々な弊害が起こっています。地球温暖化によって様々なリスクが生じています。海面上昇や高潮、洪水や豪雨、インフラ機能が停止するというリスク、熱中症が増えたり、食糧不足や水不足が起こったり、海洋生態系や陸上生態系が損失していくというリスクです。ですから、これまでの暮らしを根本から変える必要があるのです。

われわれ地球上の人口はつい最近 80 億を超えました。1 万 2 千年前に農耕牧畜が始まったころ、地球上の人口はたった 500 万人でした。それが徐々に増えて、産業革命を経て工業社会になり、そして今は情報社会を迎え、この 100 年間で人口は 4 倍になり、この 50 年間で人口は倍になりました。ヒトだけではなく、家畜もたくさんいます。ウシ、ヒツジ、ヤギ、ブタは、全て 10 億を超えています。ニワトリに至っては 500 億羽もいます。野生動物の数と比べると何と 4 桁違います。そのおかげで世界の哺乳類の 9 割以上が人間と家畜になってしまった。また、地球の陸地に占める割合を見ると、人間と家畜を食べさせる牧草地や畑が 4 割を超えました。野生動物がもっぱら暮らしている森林、これは人工林も含めてですが、たった 3 割しか残っていません。えらいことになりました。

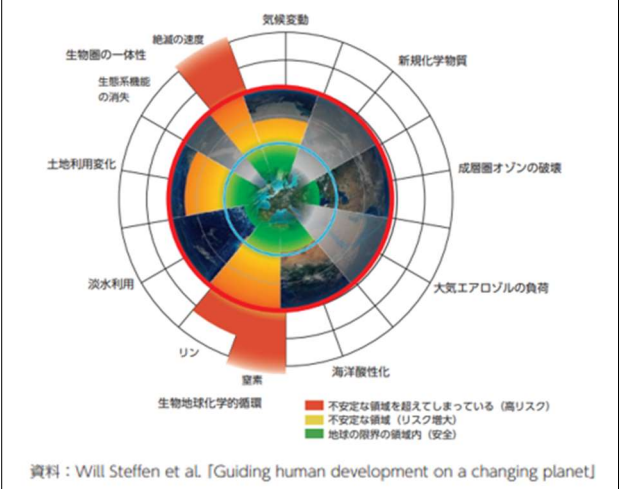
世界の哺乳類の量 人間と家畜が9割以上



21世紀になってから提唱された地球の限界を表すプラネタリーバウンダリーでは、全部で9つあるうち指標のうち既に3つが限界値を越えたと言われています。生物多様性、窒素とリンの循環、そして土地利用の変化です。他の指標もそろそろ限界値に達しようとしているものがあります。地球があぶない。人間が住めるところではなくなりつつあるということなんです。今われわれが考え直さなければならないことは、いのちといのちのつながりです。先ほど言いましたように、新型コロナウイルスはまだ人間の世界に大きな影響をもたらしている。新型コロナウィル

スだけではない。ウィルスはごまんという。まだわれわれが発見していない未知のウィルスもたくさんいるはず。それらはこれまで様々な生物とバランスを取りながら共存してきた。コウモリは宿主になっても発症しません。でもそのバランスが崩れたことによって、こういう事態になったわけです。いのちといのちのつながりをきちんと理解しながら、その上でそれを乱さないような新しい人間の暮らしを構築しなければならない。

地球の限界（プラネタリー・バウンダリー）による地球の状況
【環境省 平成30年度版『環境白書』より】



マルチプル・アイデンティティの重要性

私たちは今、現実よりもフィクションに暮らしています。通信情報機器の発達によって、われわれはリアルな現実を直視するよりも、そういった通信情報機器を通じて現実と向き合おうとしている。例えば、車を運転する時、もはや道路地図を見ないでナビを出す。ナビに目的地を入れると地図が出て、そこに矢印を描いてくれて、声で言ってくれます。「200m 先を右に曲がってください」など。そうやって運転していけば目的地に着きます。でもそれはナビを通じて現実と向き合っているのであって、現実そのものではありません。現実の世界では、鳥が飛んできたり、犬が走っていたり、親しい人が手を振っていたり、雨が降っていたり、そういうことが瞬時に起こります。それらに向かい合えない。ナビが壊れたら、自分がどこにいるかすら分からなくなってしまう。そういう事態に至っている

と思います。われわれはもはや生の自然、生の環境とともに付き合えていないのかも知れません。

私はゴリラをずっと長い間研究してきて、ゴリラと人間を比較することをよくやってきているのですが、人間はゴリラと比べて、移動する自由・集まる自由・対話する自由という3つの自由を駆使して社会を作ってきたと思います。これがだんだんと、通信情報機器の発達によって様々な変容を遂げてきた。言葉というのは今から7万年前から10万年前に出てきたものです。文字が5千年前、電話が150年前、そして40年前にインターネットが登場しました。今はSNSの時代です。だからあえて言えば、動かなくても人に出会える。集まらなくても人と交流し合える。面と向かい合わなくても人と対話できる。そういう時代になってきました。しかし、私はやはり人間とい

うのは毎日出会い、そしてその中で新しい気付きを得なければ、なかなか創造的な精神を涵養できないと思います。相手は必ずしも人でなくてもいい。海であったり、川であったり、山であったり、植物であったり、動物であったり、むしろ岩であったりでもいいんです。そういう出会いがないと、人間は活き活きとしていかないのではないかと思います。今情報革命によって我々がどういう事態に陥っているかと言いますと、人間の脳というのは意識の部分と知能の部分に分かれています。意識は感情の部分と言えます。知能は知識の集積と言ってもいい。これらは脳の中で分かち難く結びついてわれわれの判断力をもたらしてくれます。意識の部分は脳から出すことができません。知識は外出しができてそれが情報になります。それを人工知能で分析して期待値をはじき出すという技術が生まれています。しかし意識は外に出せませんから、意識で作られる直観力や情緒的社会性というものがかんたん希薄になりつつあるという危惧を抱いています。

現代は不安の時代と言われます。自治体も会社も政府もみな安全安心の環境を作りましようと言っています。安全というのは科学技術で改善するものだと思います。しかし安心はひとりでは得られないのです。人がそれを満たしてくれます。しかしながら、先ほど申しましたように人と人が信頼関係を作って組織を作るという時代ではなくて、個人がコミュニティーと切り離されてバラバラになって、直接制度やシステムと契約を結んで生きる時代になりつつあります。そのため、人々は情報を得る必要があるわけで、毎日毎日情報を得ることだけに時間を使い、人と人が繋がりが合うことがなかなか出来なくなっている。まさに、人間ではなく、制度やシステムを信頼する社会になりつつあるのではないかと思います。その結果として、世界中に張り巡らされたプラットフォームによって、フラットで均質な世界が広がってきている。

私たちは、ここで人生のあり方や社会のあり方を考え直してみる必要があるのではないかと。個人の多様な生き方、多様な価値、多様な活動というものを認め合って、それを実現する必要がある。そのためには、社会が複数のアイデンティティを持つ必要があり、それぞれが一律の暮らしではなくて、個性を持った暮らしをデザインし、その多様な暮らしがコミュニティーを作る。私たちは一度持ってしまった科学技術を簡単に手放すことはできません。ですから、それを賢く使っていかねばならない。私たちはこれから AI システムやロボットと共生していく必要があるでしょう。一方で、予想がつかない自然や、われわれ人間とは生理や姿・形が違う野生動物や野生生物たちとも共生していく必要があると思います。そして、個性的な地域社会を実現していく必要がある。そのためには、シェアリングエコノミーや分散型経済・社会、山と森の管理、農産物の輸送システムといったものをきちんと考え直す必要があるだろうと思います。

そこで、今日のテーマなのですが、人々が大きく移動する世界の中で移民社会や移民国家というものがたくさんできました。その中で格差が広がっています。公正性というものを我々はきちんと考え直していく必要がある。社会システムの担い手には自国の人間だけではなくて、いろんな国からやってこられた人々も含まれます。国としての安定性を保つためには機密と情報セキュリティというものをしっかりと守っていくことは必要ですが、そういう人々ときちんと会話をし、マルチプルなアイデンティティというものを理解しつつ、協力関係を結んでいかねばならない。とりわけ未来を作る世代である留学生を大事に育てないといけないと思います。京都府国際センターが目指す多文化共生、これは多様な民族、文化、価値観との共生です。そのためには、新たな社交を通じて積極的な交流をする必要があるのではないかと思います。

学生のまち京都

私は京都大学の総長を 6 年間やりましたので、その時の経験をもとに少し学生のことをお話ししていこうと思います。今、高等教育つまり大学に進学する学生はどの国でもどんどん増えています。大学進学率の国際比

較を見ますと、日本は微増ですが、アメリカもヨーロッパも中国も韓国もアセアン諸国も大学に進学する学生が急激に増えています。日本は約 51% で OECD 諸国の中でそれほど高い方ではありません。オーストラリアでは

ほとんどの人が大学に進学しています。韓国も 71%。日本の高校進学率は 99%ですが、大学に進学しない高校生が結構たくさんいます。しかし大学の数はどんどん増えています。782 もあり、今もう少し増えています。

大学における外国人留学生の割合を見ますと、アメリカは 20%近くありますが、日本はわずか 4%弱しか外国人留学生がいません。大学別の学生数と留学生数で比較しましても、日本の大学は留学生の割合がすごく少ない。ここでは京都大学を入れていますが、留学生の割合は韓国や中国の大学に近い。だいたいほかの国立大学も似たようなものと思います。日本の大学の海外拠点数を比べてみますと、京都大学は日本で一番海外の拠点多く、たくさんの研究者や学生を海外で勉強させているということが言えます。国際交流というの

は、大学にとって今非常に重要な課題となっています。日本から学生が海外に行き、海外から留学生が日本に来て、様々な学びを一緒にやろうとしています。

京都は人口当たりの大学数が日本で一番多いところ。京都府全体では 40 以上の大学があり、学生数では約 15 万人になります。そのうちの 1 万人強が留学生です。ですからかなりの留学生が学生の中で活躍していると言えます。日本では 2020 年度までに外国人留学生 30 万人を達成しようという目標を掲げてやってきまして、それは 2018 年に達成されたのですが、新型コロナウイルスによって急激に減ってしまいました。海外に行こうという日本人の留学生数も極端に落ちています。とりわけ、外国人留学生の就職率が下がっているというのが懸念されるところであります。

キーンさんが遺した言葉と京都の国際化

京都の人あるいは京都の特徴というのを外国人の目から眺めたときにどう見えるのかという話をさせていたこうと思います。2015 年に私が京都大学の総長だったころ、日本文学者として日本に長く滞在されていたドナルド・キーン先生と対談させていただいたことがあります。キーン先生は 1953 年から 1 年半京都大学にいらしたのですが、それからキーン先生は日本にずっと滞在されて、日本の文学を海外に紹介されました。日本文学の批評もたくさん書いておられます。そのキーンさんの目から見た京都というものについて、2022 年がキーン先生の生誕 100 年に当たることから、10 月にキーン先生のご子息の誠己さんと対談させていただき、キーンさんの遺した言葉についていろいろと語り合ったことがあります。そのことも含め、キーン先生が遺した言葉を紹介させていただこうと思います。

キーン先生は「千年も昔の暮らしが現代に息づいている都市なんて、京都以外に世界中どこにもないよ」そうおっしゃられました。これは私がキーン先生とお会いした時にキーン先生からお聞きした言葉です。「日本人は過去に背を向けていない」ローマやパリやロンドン、これは過去の遺跡はたくさん残っているけれど 18 世紀、19 世紀の暮らしを今の人たちはしていない。でも京都はど

うだ。みんな行事の時には着物を着て、畳の部屋に住み、室町時代の調度品を楽しむ。そして毛筆で字を書くではないか。こんな暮らしは世界中どこにもないよ。「遠くはるかな過去はいまだに日本の現代に入り込んでいて」、「過去と触れ合っている部分こそが、日本人の生活と諸外国との最も興味深い相違点」であろう。そして「人間は何のために生きるのか」キーン先生が日本に来て一番感動したところは「美のためだ」という言葉なのです。ね。「花より団子」と言うけれど、花（芸術）を団子（政治や経済）より重んずるのが日本人の特性だと。はるか昔の『源氏物語』には物質世界も政治世界もほとんど描かれていない」、「昔の日本の歴史書にはそこかしこに詩歌がちりばめられ、1,2 章を惜しげもなく月見や古代の庭園の描写に割いている」、「『源氏物語』の時代から今日に至るまで、多くの悲惨な出来事にもかかわらず、日本人はかつて美を礼賛する態度を失ったことがない」、「15 世紀末の応仁の乱で京都の町が惨禍を被った時、そこから 5 キロ足らずの銀閣寺で將軍義政が、茶道や新様式の風景画などの美的な快楽のために、国費の大部分を蕩尽していた」そして、芸術の発達には、一般の人々の功績が大きいとおっしゃっていました。「新しい詩歌や演劇的な娯楽は、まず一般の

大衆の間で人気を得る」それが「宮廷の保護下にある職業的な詩人や芸術家はその美的価値を認めて、熱心に可能性を高める」、「彼らの手によって、全国民が享受する芸術に発達していく」、「生け花と茶の湯は伝統的で今日でも隆盛を極める」、「茶の湯は日本人が心の底で感じている何ものかに呼応している」



日本人の自然観というのは、「古代の日本人は山々を天と地の中間地点と考えていた。上賀茂神社は、山それ自体がご神体である」、「日本人にとって、山々は精神的故郷、死後魂が帰ゆく場所、先祖の魂と家の神々が永遠に在すがゆえに、繁栄と安寧の源とされる」、「日本は、砂漠もなく、荒野もなく、肥沃で豊かな水に恵まれた国固有の緑に満ちている」、「すべての日本人が共有する楽しみは、季節の移り変わりであって、四季を認識するばかりか、四季に応答して暮らしている」これはよく言われることなのですが、例えばヨーロッパでは暑くなれば服を替える。寒くなれば服を替えます。でも日本人は暑さ寒さに関係なく、四季折々の節の日に着物を替えるんですね。着物替えと言われるように。これは四季に応答しているということになるんですね。これは欧米の方から見ると、あるいは他の国の方々から見ると不思議な現象なようです。

日本人の文化というのは「簡素は美なり」ということである、とおっしゃってました。「千年もの間、日本人は中国文明を敬い、多くのものを借入したが、日本独自のやり方を根本から変えはしなかった」、「過去と現在が共存していて、現代的な街路から、百年前とほとんど変わらない領域に足を踏み入れることができる。（マンションと

料亭が並列）」実は私も町家に住んでいますが、傍にはマンションがたくさん建っています。それらが共存しているのが京都なのですね。そして「日本語ほど、多くの他国の文学を読める言語はない」たくさんの外国の文学が日本語に訳されているのです。また「日本人はけっして自分の文化を放棄するつもりはない」とおっしゃってました。「日本ほど、ハレとケの区別がはっきりしている国はない」、「京都では一年を通じて祭りの行われぬ日はほとんどない」これをおっしゃっていたのは1960年代のことですから、その時代に比べて今は祭りがずいぶん減ったかもしれません。しかし、京都はハレの日が多いですね。「日本的つつましさは、贅を好む心と均衡している」、「日本人は並々ならぬ娯楽好きである」、「『源氏物語』に描かれている娯楽すら、今日なお消滅していない。（蹴鞠、香合わせ、書道など）」これは確かに今でもあります。「たいがいの日本人は、じゅうぶんに笑うよりも、じゅうぶんに泣くことによっていっそう幸福を感じるように見える」歌舞伎とか文楽でもそうですが、日本人は悲劇が大好きです。そして、そういう様々な催し物というのはわれわれを過去にいざなってくれる、つまりタイムマシンなのです。そのタイムマシンを通じてわれわれは常に過去と対面している。それはパラレルワールドなのだと思います。それが一方であるがゆえに現実の世界の深み、現実の世界が見せてくれる過去の重みというものを感ずることが出来るのだと思います。五山の送り火や神社仏閣はタイムマシンで、能・都をどり・歌舞伎・花街が残っているのもパラレルワールドですね。生け花、茶道には自らが参加し、違う世界の美というものを心と身体に刻み込む。京都精華大学が京都市と運営している京都国際マンガミュージアムもパラレルワールドを演出していると言えなくもない。12世紀に作られたと言われている鳥獣人物戯画は漫画のルーツでもあります。これを見立てとして、われわれは動物の姿に人間の姿を重ね合わせるができるわけです。



最後にキーンさんの助言をご紹介します結びにつなげたいと思います。「きれい好きで礼儀正しい心を忘れてはいけませんよ」とおっしゃっています。そして、これは京都人だけではなく多くの日本人がそうなんですが「外国人という固定観念を持っている。これはいかん」と。キーンさんのように外国で生まれながら日本人より日本のことをよく知っている人がたくさんいるということです。今日討論に出ていただくサコさんやアンナさんもその一人だと思います。それから、やはり「日本語だけに拘泥してはいけないう。ひとつは外国語を覚えましょう」その中で「日本文化を外から眺めながらも自信を持ってください。日本文化は遅れているという劣等感を持つのではなく、日本文化は優れているということをあらためて思い直した方がいい」そして、古典を忘れてはいけないう。「古典を文学として楽しみましょう」ということをおっしゃっていました。

京都人は「いけず」ですよ。私も東京出身で、京都であま結構長く暮らしていますが、京都人はたしかに「いけず」だと思いますよ。しかし、京都には外の人をうまく取り入れる文化があります。これまで日本の京都以外の地域から、そして外国からやってきた人々や留学生をうまく取り込んできたのだと思います。これから、これまで以上に多文化共生という心を忘れずに、外の文化をうまく取り入れながら、ミックスした新しい明るい未来を作っていければいいなと思っております。

【令和4年12月24日 京都府民総合交流プラザにて】



(公財) 京都府国際センター理事長
総合地球環境学研究所所長
前京都大学総長

山極 壽一

東京生まれ。京都大学理学部卒、同大学院理学研究科博士課程退学、理学博士。第26代京都大学総長を経て、2021年4月総合地球環境学研究所所長に就任。2022年6月より(公財)京都府国際センター理事長。日本霊長類学会会長、国際霊長類学会会長、日本学術会議会長、総合科学技術・イノベーション会議議員を歴任。現在、環境省中央環境審議会委員、京都市専門委員など多数の要職を兼任。